

みずばしょうといえは尾瀬です。広い湿原に群れをなして咲くことは、歌にも歌われているように、あまりにも有名になりました。白い残雪が影を落とす水面に、大きな白い花がずっとかなたまで続く光景は、都会に住む人たちの自然へのあこがれを強くかきたてるものでした。

大きな白い帆のような部分は花びらではありません。それに守られている黄色い棒のようなものが穂です。そこに小さな花が密生しています。これは、里芋科の植物に共通する特色です。

見た目は、西歐的なイメージがありますが、中部から北の地方に自生する日本産です。さらに北海道では住宅近くのため池やどぶにも生えているほどで、珍しい物ではありません。しかし、暖地や西日本では見られません。低温の流水を好むからです。

下水の流れ込む池では、大きく育ったものが見られますが、東北の高原では小さくかわいらしく、つつましかです。

花が終わると葉が大きく広がり、真夏にその姿を見る人は、花が咲いているときとのあまりの違いに驚くことでしょう。